

大学アーカイブズと大学アカデミズム

―教員個人・学術研究を扱う難しさ

豊田雅幸

はじめに

戦後、立教大学文学部史学科の教員であった、大久保利謙に関する論集、『明治が歴史になったとき―史学史としての大久保利謙』が刊行された。

大久保利謙は、本書の序論でも述べられているように、日本近代史研究の先駆者のひとりであり、国立国会図書館憲政資料室の創設に関わるなど、近代史研究のための史料環境の整備に尽力した人物である。また、立教大学にとっては、最初の日本近代史担当教員であり、その蔵書は、「大久保利謙文庫」として立教大学図書館に所蔵されている^①。

本書は、この大久保利謙という一人の人物に光を当て、

彼が整備に関わったアーカイブズを素材として、史学史・史料論・蔵書論といった多彩な観点を交えて、日本近代史研究の誕生を描きだすことを目的として編まれており、非常に興味深い。

筆者は、立教大学院で学び、その後、立教大学を含む立教学院の歴史研究に携わってきたこともあり、面識はないものの、「大久保利謙」という存在に触れる機会は、たびたびあった。

例えば、大学院の指導教授である栗屋憲太郎先生のゼミでは、藤原彰先生（一橋大学名誉教授）がレクチャーに来られることがあり、その際、歴史家としての大久保「リケン」先生について、華族出身ならではの逸話とともに、貴

重な話を伺っていた。

また、立教学院史の研究においては、図書館に所蔵される「大久保利謙文庫」にお世話になることもしばしばであった。さらに、『立教学院百二十五年史』の編纂では、新制大学の専任教員一覧の作成を担当し、大久保利謙の立教での在任期間について調べたこともあった^②。

しかしながら、歴史家としての大久保利謙に注目し、その学術研究について、立教学院の歴史という視点から捉え、掘り下げてみようという発想そのものを持ち得ていなかった。その意味において、立教大学文学部史学科の一人の教員に焦点を当てた本書の登場は、興味深いという以上に、立教学院史に関わる身として、大いに刺激を受けた。

大学に関する資料を扱う大学アーカイブズにおいても、大学にとって基本的な機能である、学術研究に関する資料は重要である。しかし、教員の研究資料の扱いや、学術研究の成果の扱いについては、さまざまな問題が存在しているのが実情である。

そこで小論では、大学アーカイブズの現状を確認しつつ、実際の現場において、教員個人やその学術研究を扱うことの難しさについて考察してみたい。その上で、本書の持つ意義についても考えてみたい。

一 大学アーカイブズの現状

(一) 大学アーカイブズの広がり

近年、大学においては、年史編纂などを契機として、大学関係資料を扱う大学アーカイブズを設ける動きが、少しずつ広がりを見せている^③。また、そうした動きと連動して、アーカイブズを活用した自校史教育の展開や、大学の歴史に関する展示活動なども活発になっていくように思われる。

特に、国立大学においては、「国立公文書館等」の指定を受けた図書館を設置する動きが、旧帝国大学の枠を越えて見られるようになり、現在では一二大学を数えるまでになっている^④。こうした動きは、二〇〇一年施行の「情報公開法」、二〇一一年施行の「公文書管理法」といった法律が「後押し」となっているが、大学の中で制度的に位置づいた組織となっている点が、大きな変化と言えよう。

その一方で、私立大学においても、大学の歴史的資料を所蔵する機関を持つ大学は、かなり多くなってきた。大学史に関する情報交換と研究、並びに会員相互の質的向上と交流をはかることを目的に設立された「全国大学史資料協議会」には、東日本部会に六七機関、西日本部会に三三機関が会員登録をしている^⑤。

しかし、法律による裏付けのない私立大学の場合、個々の大学の事情を背景として設置されるため、国立大学の文書館とは、かなり状況が異なっている。資料所蔵機関の名称に注目してみても、「アーカイブズ」「資（史）料センター」「資（史）料室」「歴史資料館」「資料編纂室」「編纂室」「研究センター」「歴史館」「教育研究所」「資料課」「博物館」「記念館（室）」「ミュージアム」「展示館」といった具合に、多種多様であることがわかる。⁵⁶

広島大学文書館長であった小池聖一氏は、このような大学アーカイブズを、以下の四つに類型化している。⁵⁷

①公文書館型

公文書管理法が契機となり、大学の文書管理業務と連携をとった形で設置

②年史編纂型

年史編纂事業が終了した後、集積された資料の保存・

管理・公開を目的に設置

③創立者・創立経緯重視型

大学の創設者および創立経緯を重視して設置

④同窓会対応型

大学の同窓会・校友会等を基盤として設置

このうち、設立経緯として最も多いのは、②の「年史編纂型」である。年史編纂事業は、周年事業の一環として実

施されるため、その後継事業としてアーカイブズを設置する場合、組織的な継続性があり、全学的な合意も得やすいという特徴によるが、そのようなタイミングでもなければ、設置そのものが難しいというのが実際のところであろう。

①の「公文書館型」は、既に確認したように、「国立公文書館等」となっている国立大学に見られる形態である。

③の「創立者・創立経緯重視型」は私立大学に多く見られ、④の「同窓会対応型」は、まだあまり例はないようだが、同窓会や校友会との連携関係を強くすることで、入学者や就職情報などの貴重な情報源の獲得につながる、とされる。

立教学院について見てみると、一九九九年度をもって『立教学院百二十五年史』の編纂が終了したことを契機として、翌二〇〇〇年に、アーカイブズセクションとしての「立教学院史資料センター」を立教大学に設置している。年史編纂事業の「終幕」として設置されているので、②の「年史編纂型」に該当する。設置にあたっては、①の公文書館型のように、法人の事務文書等を、システムチックに移管できるような形を目指したが、残念ながら実現しなかった。その一方で、立教の歴史にかかわる研究、教育への還元などに重点を置いているのが特徴である。

また、二〇一四年には、経営法人である立教学院に、「立

「教学院展示館」を設置している^⑩。立教の建学の精神と、その歩んできた道を展示する施設であるため、博物館としての性格も持っているが、役割としては、立教各校の自校史教育の場となり、広く一般に対しても情報発信を行っている場となっている。また、所蔵資料は、主に卒業生から寄贈されたものになっている。そうした意味においては、③の「創立者・創立経緯重視型」と、④の「同窓会対応型」の両方の要素を持った大学アーカイブズとも言える。

(二) 大学アーカイブズの役割

「アーカイブズ」という言葉そのものは、少しずつ浸透しているように思われるが、果たして、その意味するところに対する理解はどうかであろうか。おそらく、日本での一般的な理解では、アーカイブズとは、古い歴史資料であり、その古い歴史資料を収める倉庫のようなもの、「歴史資料館」のようなもの、という感じではないだろうか。

確かに、アーカイブズには、そのような機能も含まれるが、本来の役割は、決してそれに止まるものではない。国立公文書館の常任理事であった大濱徹也氏は、アーカイブズを次のように定義している^⑪。

アーカイブズは何かというならば、開かれた構造を維持・保障していくために組織が営んだ、その諸活動を

支えた知的な生産物を体系的に次の世代に伝えることで、組織を効率的・合理的に運営し、組織に活力をもたらすための管理された情報、あるいは資源としての情報を司る機関、知と情報を担うインテリジェンスの府ともいべきもの

さらに、アーカイブズの使命（責務）を、次の三点に整理している^⑫。

- ① 国家・コミュニティ・企業・学校など、アーカイブズの存立母体となっている諸組織の記録を体系的に残し、組織の円滑かつ適切な運営と継続性を保障する。
- ② アーカイブズは、いかなる状況になろうとも、記憶の宮殿として、コミュニティの記憶、国家・民族のなかで無化された記憶を蘇生し、共有する場を用意する責務。
- ③ 記憶を蘇生せしめる知の遺産を継承する器であり続けることで、多様な情報資源の保管庫たる責務。

周知のように、日本は近代化の過程において、欧米からさまざまな文化を取り入れてきたが、そうした中で、図書館や博物館などは、広く社会に認知されるようになり、一般の人々が利用する施設として定着するようになった。しかしその一方で、アーカイブズや文書館については、まだ社会的な認知度は低く、その利用者も、歴史研究者や歴史

に関心のある、ごく一部の人に限定されているのが現状であろう。

こうした日本の状況は、アーカイブズに関わる人々、利用する人々の意識が、「歴史」というものに偏っていることを物語っている。それゆえ、アーカイブズは、「歴史」のみに貢献するものではなく、それぞれの機関が日々生み出している記録を、作成段階から管理し、選別・保存していく営みを担い、組織の構成員すべてに開かれるとともに、組織を活性化させるための、いわば「組織の貌」ともなりうるものである、という点が強調されるようになってきている。^⑤

しかし、このような機能をもったアーカイブズは、日本では、ほとんど実現しておらず、日本における「アーカイブズ文化」をいかに豊かなものにしていくのかということ^⑥が、現在、まさに問われている課題とも言える。

さて、こうしたアーカイブズの使命というものを踏まえ、「大学アーカイブズ」について考えたとき、その営みはどのようなものになるのであろうか。先ほどの大濱氏の言葉を借りると、おおよそ、次の諸点が大学アーカイブズに求められる課題と言えよう。^⑦

① 歴史編纂事業の終幕としてではなく、つくられた歴史を、新たにつくり替えていく場と位置付ける

② 大学の組織運営の効率と向上をはかる器となる

③ 文化的な営みを支える場をめざす意味で、研究・教育の質を保障する（大学アーカイブズに残された記録をもとに、大学の研究とは、教育とは何かを、常に問い質す）

④ 卒業生・教職員・学生の諸権利に関する証し、根拠となる

⑤ 大学マネジメント、経営・戦略の府となる

このように、大学アーカイブズの場合においても、大学が生成した記録を体系的に残し、歴史のみならず、組織運営に寄与し、研究・教育等の「検証の器」となること、そして、大学の構成員すべてに開かれたものとなることが求められていると言える。

（三） 大学アーカイブズの活動

大学アーカイブズの活動は、言うまでもなく、それぞれの大学の歴史にかかわる記録・資料を基盤としてなされるため、そうした資料の収集、整理、保存が核となる。特に、国立大学に見られる「公文書館型」では、法人文書を受け入れ、公開することに重点が置かれている。

また、「年史編纂型」においては、大学史の調査・研究、編纂も、引き続き、重要な業務として位置付けられている。

近年では、こうした業務に加え、自校史教育の展開、展示会の開催、シンポジウム・講演会等の実施、レファレンスサービス、出版物等の編集・刊行など、実に多様化している。また、その方向性も、大学内へ向けたものだけではなく、受験生・保護者への情報発信、校友へのサービス、地域貢献・社会連携など、学外へも広がりを見せている。

私立大学の場合、それぞれの大学の歴史や伝統、学内事情を背景として設置されるため、そのあり様は実にさまざままで、組織内において期待される役割も、業務の重点の置き方も、微妙に異なっている。そのため、先に確認したように、組織名称も、かなりバラエティに富んだものとなっているのである。

しかしながら、こうした活動を支える体制面に目を向けると、組織的な不安定さや、予算・人員が極めて限られているなど、大学アーカイブズの置かれた厳しい現実、共通項を見出すことができないのではないだろうか。

大学アーカイブズが、大濱氏が指摘する課題をクリアできるようになるためには、こうした点の改善が必要不可欠であろう。

二 教員の研究資料の扱い

(一) 大学アーカイブズの収集資料

先述したように、大学アーカイブズの活動の基盤となるのは、大学に関わる記録・資料であるが、「何を」、「どこまで」収集し、保存するのかという点については、さまざまな議論がある。

大学アーカイブズに関する寺崎昌男氏の先駆的な研究では、世界の大学アーカイブズの調査・研究をもとに、大学アーカイブズで収集されている資料として、以下のものがあげられている^⑤。

① 大学運営の歴史を示す公的文書、簿冊、事務記録、その他の文書

② 大学内諸機関の議事録、意見書、答申、報告書等

③ 大学の刊行する年報、要覧、雑誌、新聞、広報紙誌等

④ 大学卒業生の卒業証書、アルバム、講義ノート、伝記、書簡等々（とくに当該大学に関係あるもの）

⑤ 学長、学部長、教授、職員等の私蔵する文書類のうち、とくに大学に関係するもの

⑥ 大学設立者、寄附者、卒業生など関係者の文書

⑦ 大学の歴史を示す記章、門標、記念品、トロフィー、旗、制服、制帽、印璽等々の物品

⑧ 大学に関する写真、テープ、ビデオテープ、フィルム等
⑨ 大学史に関する諸刊行文献

⑩ 学問的な意味をもつ実験器具、研究室製作品、報告書等
このうち、基幹部分は①～⑥の文書資料であり、⑦⑧等の記念的物品、視聴覚資料などを収集・保存するところに、大学アーカイブズの特色があると指摘されている。

この具体的な指標は、個別の大学の枠を越えた「モデル」としての役割を長く果たしてきた。¹⁶その後、文書館学・史料管理学などの研究が進展するなかで、アーカイブズが扱う資料を、「組織資料」と「歴史資料一般」、¹⁷「組織運営のための文書」と「+α」といった二分法で捉える考え方が普及してきている。すなわち、大学という「親機関」が組織運営のために作成、收受、蓄積した資料を「核」とし、それ以外の資料を、個々のアーカイブズが独自に収集する「+α」と捉える考え方である。

（二）教員の私蔵資料

このように、大学アーカイブズの基本的な目的を、大学の組織運営に関わる資料を保存する、という点に置く場合、それに関わる事務文書が、大学アーカイブズが扱うべき「核」の資料になる。したがって、そのような事務文書とは異なる、教員が私蔵する資料は、「+α」となり、収

集の対象とするかどうかは、それぞれの大学アーカイブズの判断次第ということになる。

先の寺崎氏の指標^⑤でも、教員の私蔵する資料は基幹部分の資料とされているが、「とくに大学に関係するもの」との限定がなされており、教員個人に関わる研究資料は、射程範囲外とも受け止められる。

そもそも、アーカイブズが扱う組織運営のための事務文書には、現用から非現用というライフサイクルがあり、それに応じた管理が求められる。しかし、教員の研究活動によって発生した様々な資料を、そうしたライフサイクルで捉えることは難しく、厳密な意味では、研究資料それ自体は、アーカイブズではないとされる。¹⁸

とは言え、「+α」とされる教員の私蔵資料を受け入れたり、退職教員に資料の寄贈を呼びかけたりしている大学も少なくないであろう。¹⁹教員の私蔵資料の場合、研究資料だけではなく、大学行政に関する資料や、教育活動に関する資料が混在しており、おそらく、そうした資料に対する関心の方が、高いものと思われる。

もちろん、大学の創立や存立に密接に係るような研究分野であれば、研究資料への関心も高まるであろう。しかし、そのような特別な理由でもない場合、果たして、どれほどの関心が、研究資料に向けられているのであろうか。

大学において行われている学問研究は、当然のことながら、多岐に渡る。総合大学であれば、なお更である。収蔵スペースや人的資源など、物理的な限界を抱える大学アーカイブズが、研究資料を扱うとしても、その範囲は、極めて選択的にならざるを得ないのが、実情ではないだろうか。

(三) 図書館・博物館との関係

研究資料を含む教員の私蔵資料の扱いについては、大学アーカイブズだけではなく、大学図書館や大学博物館と連携することが望ましいとの指摘がなされている²¹⁾。

図書館は図書資料、博物館は実物資料、アーカイブズは文書資料といったように、基本的に、それぞれが扱う資料には形態上の違いがある。一方、教員の研究資料の場合も、図書、文書資料が中心となるが、研究分野によっては、実物資料も存在する。

このような資料の形態の問題に注目して見ても、それぞれ適性の異なる三者の連携が可能となれば、理想的と言えよう。しかし、資料には、群としてのまとまりにも重要な意味がある。形態ごとに、それぞれをバラバラに管理すればよい、という単純な問題ではないことは、周知の通りである。

しかし実際には、大学図書館には、「大久保利謙文庫」

のように、教員の蔵書を中心とした資料が文庫として受け入れられている事例は、かなり多いであろう。また、総合博物館などでは、教員の研究成果や実験器具などの実物資料を受け入れられている場合もあるが、その際、図書や文書資料との関係性は、どのように担保されているのであろうか。アーカイブズ同様、図書館・博物館にもそれぞれ独自の目的があり、大学内で果たすべき役割も異なる。そうした違いが、学内における「棲み分け」を可能にしているとも言える。

こうした違いを前提とした上で、どのような連携が可能なのかという問題は、おそらく、現場だけではなく、大学全体として共有すべき課題のように思われる。

大学にとって「研究」は、欠くことのできない機能である。その重要な営みについて、「何を」、「どこまで」残すのか、そして、それを「どこが」、「どのように」扱うのか、全学的な議論がなされてもよいのではないだろうか。

三 教育個人とその学術研究の扱い

(一) 関心の方向性と人選の問題

大学の歴史の中に、特定の個人や団体をどのように取り上げ、位置づけるのかということは、実に悩ましい問題で

大学アーカイブズと大学アカデミズム（豊田）

ある。

大学アーカイブズが、組織運営に関わる資料を基盤として、大学史研究もまた、組織としての歩み、基本的な動向という面に、まず関心が向けられる。そのため、取り上げられる人物は、創設者やその協力者、建学の精神に関わる人物、要職を務めた人物など、大学の組織運営に大きな貢献を果たした人物が中心となる。

少し古いものになるが、自身が編纂に関わった『BRICKS AND IVY 立教学院百二十五年史 図録』（立教学院百二十五年史編纂委員会編、二〇〇〇年）を例に挙げると、本編で取り上げた人物は六八名（表一）であるが、ほぼ、「長」の付く人物である。一般の教員も数名いるが、これは、掲載資料との関係で取り上げたもので、その教員の学術研究に注目したものではない。

	人名	肩書・役職等
1	ウィリアムズ	創設者
2	ブランシェ	草創期の教員
3	クインビー	草創期の教員
4	ガーディナー	校長
5	マキム	理事長
6	ディング	校長
7	左乙女豊秋	校長
8	元田作之進	大学学長
9	ロイド	総理
10	ウォーク	中学校教師、大学教授（寄宿舎で学生指導）
11	タッカー	総理
12	鈴木一	大学商学部長
13	ライフスナイダー	理事長、総理、総長
14	小島茂雄	中学校校長、大学文学部長
15	諸星寅一	中学校教諭（校歌・校章・校旗の改定）
16	杉浦貞二郎	大学学長
17	木村重治	大学学長
18	ジョン・ウィルソン・ワット	米国聖公会伝道局
19	松井米太郎	理事長
20	遠山郁三	総長、大学学長
21	松崎半三郎	理事長
22	三辺金蔵	大学総長・学長
23	柳田秀夫	中学校配属将校
24	帆足秀三郎	中学校校長、大学学監
25	宮本馨太郎	大学教授（日記の執筆者）
26	伊東多三郎	大学講師（日記の執筆者）
27	植村眞久	大学卒業生（神風特別攻撃隊員として戦死）
28	花房正雄	中学校校長
29	藤谷雅春	中学校教諭（勤労動員日誌の執筆者）
30	須藤吉之祐	大学総長事務取扱
31	佐々木順三	大学総長
32	マベル・ルース・シェパー	小学校主事
33	佐々木喜市	高等学校主事・校長
34	有賀千代吉	小学校主事・校長
35	酒向誠	小学校校長
36	伊藤高清	小学校校長
37	廣澤節三	小学校校長
38	小川正夫	小学校校長
39	田中司	小学校校長
40	高橋昊	中学校校長
41	西村哲郎	中学校校長
42	国見登	中学校校長
43	横内允	中学校校長
44	中島博	中学校校長
45	縣康	高等学校主事・校長
46	浅越敏彦	高等学校校長
47	岩田義夫	高等学校校長事務取扱
48	浅香良平	高等学校校長
49	樺忠志	高等学校校長
50	松平信久	高等学校校長
51	菅岡吉	大学文学部長
52	河西太郎	大学経済学部長
53	杉浦義勝	大学理学部長
54	淡路円治郎	大学社会学部長
55	宮沢俊義	大学法学部長
56	松下正寿	大学総長
57	菊井維大	大学総長事務取扱
58	大須賀潔	大学総長
59	平井隆太郎	大学総長事務取扱
60	佃正昊	大学総長事務取扱・総長
61	尾形典男	大学総長
62	高橋健人	大学総長事務取扱・総長
63	牛窪浩	大学総長事務取扱
64	浜田陽太郎	大学総長
65	岡本伸之	大学観光学部長
66	関正勝	大学メディア福祉学部長
67	塚田理	大学総長
68	大橋英五	大学総長

（表一）『BRICKS AND IVY 立教学院百二十五年史 図録』で取り上げた人物

そもそもこの書籍は、「立教学院百二十五年史」の資料集の一つで、簡便な通史を兼ねた写真集であるため、学術研究にまで踏み込むことができなかった、という事情もある。しかし仮に、学術研究を取り上げるとしても、誰の研究を、どのような基準で取り上げるのか、という大きな問題がある。

例えば、京都大学では、百周年時計台記念館に、「京都大学の歴史」という立派な常設展が開設されている。その中で、「戦前・戦後の学者たち」というテーマのもと、「西田幾多郎と『京都学派』」と「湯川秀樹」が取り上げられているが、展示制作を担当した京都大学文学書館の西山伸氏は、製作の意図について、次のように述べている。²²⁾

大学史の展示を行う場合、その大学に所属する研究者による学術研究成果をどのように取り扱うのかということは検討する必要がある。これは展示の製作主体や、当該大学における他の展示施設の有無などとの関係がある問題といえる。結論から言えば、今回の展示では、学術研究成果を積極的に取り上げることとはしなかった。京大の場合は、総合博物館という「学術標本資料に関する収蔵、展示、公開及び教育研究の支援を行う」ことを目的とする施設が既にあるということが大きな理由であるし、現実的な理由としてはどの範囲

まで取り上げるべきかという議論が大変難しいということもあつた。ただし、例外として「西田幾多郎と『京都学派』」および「湯川秀樹」という二つのテーマを設定した。これは来場者を想定したときに最低限必要であろうという範囲として扱うことにしたものである。これは展示の事例ではあるが、学内に既に存在する総合博物館との関係性の問題とともに、取り上げる範囲の難しさが指摘されている。

学術研究に限らず、大学スポーツや著名な校友を取り上げる際にも共通するが、なぜ取り上げるのか、なぜ取り上げないのか、その明確な基準を設けるのは、かなりの難題と言えよう。

（二）他大学の取り組み

こうした難しさがある中で、人物そのものに焦点を当てた取り組みをしている大学の事例も存在している。

例えば、神奈川大学では、二〇二八年の創立一〇〇周年に向けた取り組みとして、『神奈川大学人物誌 横浜専門学校編』（二〇一八年）、『神奈川大学人物誌 神奈川大学編』（二〇一三年）を刊行している。『横浜専門学校編』では、二七名の教員が、以下の基準によって取り上げられている。²³⁾

創立者、横浜専門学校の創立・経営において欠くべからざる協力者、横浜専門学校の創立から戦中期において学校運営に特に功績が認められる人物、その担当分野において特に際立った業績を残した教員

やはり、組織運営への関わりが重要な基準となっているが、「担当分野において特に際立った業績」もあげられており、興味深い。

『神奈川大学編』では、「横浜専門学校から神奈川大学へと昇格してから大学紛争という激動の時代」（一九四九～一九六九年頃）の教員三七名が、以下の基準のもと、取り上げられている。²⁴

大学運営や研究において代表的な人物、特に、当時大学の教学上の実質的な運営を担っていた教務委員会と、重要事項を審議した教授会のメンバーを主体に人選

こちらにも、組織運営との関わりが重視されているが、研究における代表的な人物にも目配りがされている。なお、執筆にあたっては、全て書き下ろしを予定していたとのことであるが、一部は、『神奈川大学を築いた人々』（学校法人神奈川大学、二〇〇一年）からの採録となっている。

「担当分野において際立った業績」や、「研究において代表的な人物」がどのように選定されたのか、その点に関し

ては明示されていないが、神奈川大学では、一九八二年に『神奈川大学五十年小史』を刊行して以降、一〇年ごとに記念誌（写真集）を刊行している。また、一九八四年からは、『神奈川大学史資料集 第一集』の刊行が開始され、二〇二一年には、第三七集が刊行されている。

人物誌刊行の背景には、このような息の長い、そして堅実な取り組みが、大きな力として働いているのではないだろうか。

特定の人物については、より深い研究を実施している大学に、明治大学がある。明治大学史資料センターでは、「私学としての本学の特徴を重視し、創立者と校友、そして地方・地域の調査に力点」を置き、共同研究プロジェクト・チームによる、複数年に渡る資料調査・研究活動が行われている。²⁵これまで、①創立者研究会、②人権派弁護士研究会、③アジア留学生研究会、④財界人研究会、⑤昭和歌謡史研究会、⑥文学者研究会、⑦三木武夫資料研究会、の七つのプロジェクトが実施され（二〇一八年現在）、その成果は、『大学史紀要』や「大学史資料センター研究叢書」という形で発表されている。²⁶

これらの研究においては、首相を務めた三木武夫、人権派弁護士の布施辰治や山崎今朝弥、作詞家の阿久悠、といった著名な校友が多く取り上げられているが、教員では、

尾佐竹猛と木村礎が研究対象となっている。両名に関する研究成果は、『尾佐竹猛研究』（二〇〇七年）、『木村礎研究——戦後歴史学への挑戦』（二〇一四年）として刊行されている（ともに「大学史資料センター研究叢書」）。

尾佐竹猛は、明治法律学校を卒業し、大審院判事、歴史学者として活躍し、明治大学法学部教授・初代文科専門部長を務めた人物だが、本研究書は、「吉野作造らと明治文化研究会を組織し、明治大学の建学理念と深く関わった尾佐竹の維新史、文化史、憲政史を中心に、人と学問そして事蹟を幅広く論じる」ものとなっている。

一方、木村礎は、明治大学の学長も務めた名誉教授で、日本村落史、近世史研究者として広く知られている人物である。本研究書は、村歩きによる「近世村落史」研究、歴史資料保存運動、「大学史」への尽力、大学行政といった、幅広い活動を網羅的に扱ったものとなっている。

こうした人物研究は、「駿台学」と名付けられた枠組みによって実施されている。「駿台学」とは、社会的に活躍した明治大学関係者たちが、「明治大学の駿河台という象徴的な場所で何を学んだのか、そして、その後の活躍の精神的バックグラウンドとなったものが何であったのか、そのことを研究していくための思考の枠組みとして考え出されたもの」で、過去の顕彰だけではなく、「精神的伝統をど

のようなスタイルで継承していけばいいのか」という、未来へ向けての明治大学の「個性化」という視点が重視されている。²⁸⁾

また、これらの研究と並行して、二〇一一年には、『明治大学小史——人物編』も刊行されている。これは、明治大学創立一三〇年記念事業の一つとして企画されたもので、『明治大学小史——(個)』を強くする大学一三〇年（本編）の姉妹編という位置づけがなされている。これは、「歴史は「人」がつくるものであり、とりわけ明治大学という教育研究機関の歴史においては「人」を抜きにしてその歴史を語ることはできません。その意味においては、「小史」といえども人物編をぬきにしては成り立たない」との考えによるものである。²⁹⁾

編集にあたっては、以下の四点が基本方針とされている。

- ①「本編」を補完するものとする
- ②一〇〇名を目途に最小限の人選を行う
- ③原則的に物故者に限定
- ④分野ごとに総説を設け、現在活躍中の卒業生も視野に入れる

一〇〇名の人選については、一〇の分野に区分し、分野に一〇人を配置し、分野の担当者が人選および執筆を行っている。一〇の分野は、①創立期の人びと、②初期の卒

業生と大学行政に携わった人びと、③アカデミズムを担った人びと、④法曹界の人びと、⑤政治を志した人びと、⑥財界の人びと、⑦作家・評論家の系譜、⑧芸能・文化の人脈、⑨スポーツ界の人びと、⑩アジア人留学生、となっている。³⁰

このうち、「③アカデミズムを担った人びと」に注目してみると、人選の基準は、次の四点になっている。³¹

①創成記に関しては、明法寮（司法省法学校）出身で明治法律学校で教鞭を執った人

②学会の会長や副会長・理事を務めた人で著しい学問的業績をあげた人

③学部から一名

④物故者に限定
このような基準のものと、先に触れた尾佐竹猛、木村礎を含む一人名が取り上げられ、それぞれ見開き二頁の記載がなされている。

以上のように、明治大学では、明確に「人」を重視した調査・研究がなされているという特徴が指摘できよう。また、共同研究プロジェクト・チームのメンバーや執筆陣を見ると、明治大学史資料センターの所長、副所長、運営委員、調査研究員といった、学内の教員が積極的に関わっており、調査・研究体制の厚みを感じさせる。

おわりに

以上確認したように、日本における大学アーカイブズは、まだ歴史は浅く、多くの問題を抱えながら、現場で発生している実務と、あるべき大学アーカイブズ像との整合を図るべく、模索している段階と言えよう。

そうした中で、大学アーカイブズが、教員の研究資料や学術研究の成果といった、大学アカデミズムをどのように扱うのか（または扱わないのか）という問題は、それぞれが、自らの目的や活動を見直す、一つの糸口とも成り得るもののように思われる。

行論で事例として挙げた大学は、組織や人員体制、教員の協力体制などが、他に比してしっかりとした大学アーカイブズを擁している。しかし、立教を含め、多くの大学では、そうした基盤の整備自体が大きな課題のままである。ある意味、教員を含む人物研究の進展具合は、その大学のアーカイブズや大学史研究の状況を映し出す鏡とも言えるのではないだろうか。

さて、こうした大学アーカイブズの地平から、『明治が歴史になったとき』を見ると、このような研究書が、立教の教員が中心となって編まれたということに、まず、その意味を感じる。というのも、他大学の担当者からは、大学

の歴史に関する展示を開催しても、現役の学生・教職員が一番見に来てくれない、といった話をよく耳にする。幸い、立教学院展示館では、隣接する小・中・高での授業利用が定着し、大学の授業でも、繰り返し利用となっているものも、いくつかはある^{②③}。しかし、大学の展開コマ数から見れば、まだほんの一部であり、立教の歩みについて、大学の教員に関心を持ってもらうことは、現在においても大きな課題であるからである。

さらに、本書では、幅広い観点から大久保利謙が論じられる中で、立教大学文学部史学科の小澤実氏が、「大久保利謙と立教大学史学科（一九五八〜七一）」として、大久保の、立教の教員としての側面を分析していることの意味も大きい。

本稿では、自伝や回想記事に加え、「文学部教授会記録」が活用されているが、年史編纂などにおいて最もアクセスしにくい資料の一つが、この教授会記録なのである^④。アーカイブズ側の研究からでは把握し得ない叙述はもとより、大学史研究における教員の関わりの重要性を示していると言えよう。

同じく、史学科の佐藤雄基氏は、「大久保利武・利謙父子の学問形成と蔵書」として、立教大学図書館と学習院大学史料館に所蔵される「大久保文庫」を手掛かりに、「歴

史家の蔵書からみた史学史」を試みている。

研究上の参考資料として利用される図書を、「書物」というモノとして捉え、活用していくという着想は、アーカイブズにおいても、重要な視点となろう。

しかし、惜しむらくは、行論でも触れられているように、大久保の私蔵資料は、立教と学習院以外にも、国立国会図書館憲政資料室、朝河貫一研究会、東京大学百年史史料室などに寄贈・寄託され、資料群としてのまとまりを失ってしまっている^⑤。「資料所蔵の適材適所主義」という考え方もあるが、「大久保利謙」という人物そのものを研究对象とした場合、資料が、群として持つ情報もまた、重要であろう。

立教は、二〇二四年に創立一五〇周年を迎える。この長い歴史の中で、大久保利謙以外にも、「担当分野において際立った業績」、「研究において代表的な人物」、「著しい学問的業績をあげた人」に該当する事例は、決して少なくないであろう。

『BRICKS AND IVY 立教学院百二十五年史図録』では、人物を「長」という側面から取り上げたが、そのうちの一人、新制大学発足時の理学部長であった杉浦義勝教授は、量子力学の日本への移入に重要な役割を果たし、

大学アーカイブズと大学アカデミズム（豊田）

仁科芳雄と並ぶ、日本物理学史上の重要人物とされる。³⁵しかし、学内においては、理学部創立者の物理学者としての業績を知るものは、ほとんどいない。一方で、物理学者・科学者、科学史家の間では、その名前と業績は知られても、立教大学理学部と結び付けられることはない³⁶とされる。

こうした事例が示すように、立教大学のアカデミズムを再発見し、立教の歩みの中に位置付けていくという作業は、重要な課題と言える。本書の登場により、より一層、議論が深まることを期待したい。

註

- (1) 佐藤雄基「序論」、佐藤雄基編『明治が歴史になったとき―史学史としての大久保利謙』（勉誠出版、二〇二〇年）所収、四頁。
- (2) 立教学院百二十五年史編纂委員会編『立教学院百二十五年史資料編第3巻』（学校法人立教学院、一九九九年）、二二二頁。なお、『明治が歴史になったとき』所収、小澤実「大久保利謙と立教学院史学科（一九五八〜七二）」（九〇頁）では、大久保利謙の在任期間について、教授であった期間（一九五九年四月〜一九六五年三月）の就任前一年間と、退任後から七〇歳まで「専任講師」であったとしているが、大学の人事情報が記載された「人事カード」では、教授就任前の一年間は「講師（兼任）」、教授退任後の一九六五年四月から一九七一年三月までは「非常勤講師」が「委嘱」されたことになっている。人事カードで「非常勤講師」との記載が見られるのは、一九五九年四月一日以降のことであり、おそらく、この時期に職制に関する変更が行われていると考えられるが、詳細は不明である。関係者の証言との差異については、より慎重な検討が求められよう。
- (3) 「大学アーカイブズ」の定義については、さまざまな議論があるが、ここでは、「大学という組織のあゆみを示す資料（大学史資料）を保存・活用する施設・機関」とする。桑尾光太郎・谷本宗生「大学アーカイブズのあゆみ」、全国大学史資料協議会『日本の大学アーカイブズ』（京都大学出版会、二〇〇五年）所収、二二頁。
- (4) 内閣府ホームページ「国立公文書館等の一覧」。https://www8.cao.go.jp/chousei/koubun/about/kikan/kantou/kantou.html（最終閲覧日二〇二一年二月二日）
- (5) 全国大学史資料協議会ホームページ「会員名簿」。http://www.universityarchives.jp/membership.html（最終閲覧日二〇二一年二月二日）
- (6) 同前、「大学史資料所蔵機関紹介」。http://www.universityarchives.jp/institutes.html（最終閲覧日二〇二一年二月二日）
- (7) 小池聖一「大学文書館のサービスマネジメント」『情報科学』五八巻一、二〇〇八年、五四八〜五五三頁。
- (8) 立教学院史資料センターの設置については、立教学院史編纂室「立教学院史資料センター」発足「立教フォーラム」八号（二〇〇一年）、五八〜六三頁を参照。
- (9) 筆者は、立教学院史資料センターの設置準備に携わり、他大学の事例を参考に、非現用となった事務文書を同センターへ移管し、その廃棄権限を資料センター長に置くことなどを盛り込んだ提言文書の作成に関わった。この提言文書が、その後、学内でどのように検討されたのかについては不明である。
- (10) 立教学院展示館の設置については、『立教ディスプレイ―立教学院展示館年報』創刊号、（二〇一六年）を参照。
- (11) 大濱徹也『アーカイブズへの眼―記録の管理と保存の哲学』（刀水書房、二〇〇七年）、一七頁。
- (12) 同前、五〜八頁。小池聖一「アーカイブズと歴史学―日本における公文書管理」（刀水書房、二〇二〇年）、五〜六頁。
- (13) 大濱、前掲書、七七〜九三頁。
- (14) 同前、一六七、一七二頁。
- (15) 寺崎昌男「大学アーカイブズ（archives）とはなにか」『東

大学アーカイブズと大学アカデミズム(豊田)

- 京大史紀要』四号(一九八三年)、二〇三頁。寺崎昌男「大
学アーカイブズ(文書館)私見」『九州大学史料室ニュー
ス』一九号、(二〇〇二年)、三頁。なお、永田英明「大学アー
カイブズ資料論」前掲『日本の大学アーカイブズ』、三九〇
四〇頁も参照。
- (16) 永田、前掲論文、四〇頁。
- (17) 神谷智「大学アーカイブにおける資料の収集・整理・保存・
公開について」『日本の大学アーカイブズ』、五三〇〜五四頁。
- (18) 森本祥子「大学組織のアーカイブズ：理論と実践の提示
への期待」『日本の大学アーカイブズ』、一〇七〜一〇八頁。
- (19) 同前、一〇三〜一〇七頁。森本祥子「研究活動の資料とアー
カイブズ」『京都大学文書館だより』三号、(二〇〇二年)、
五〇〜七頁。
- (20) 永田、前掲論文、四六頁。堀田慎一郎「大学アーカイブ
ズにおける個人文書の諸問題」名古屋大学の例を中心と
し「全国大学史資料協議会西日本部会編『研究叢書』八号、
(二〇〇七年)、七七頁。
- (21) 森本「研究活動の資料とアーカイブズ」。永田、前掲論文、
四七頁。
- (22) 西山伸「大学文書館における展示活動」常設展「京都大
学の歴史」を中心に「『京都大学文書館研究紀要』三
号(二〇〇五年)、一三二頁。
- (23) 神奈川大学資料編纂室『神奈川大学人物誌 横浜専門学校
編』(学校法人神奈川大学、二〇一八年)、一頁。
- (24) 神奈川大学資料編纂室『神奈川大学人物誌 神奈川大学編』
(学校法人神奈川大学、二〇二二年)、一頁。
- (25) 「明治大学史資料センター」ホームページ。https://www.meiji.ac.jp/history/business/about.html (最終閲覧日二〇二一年
二月二日)
- (26) 同前。
- (27) 『日本経済評論社』ホームページ。http://www.nikkeihyo.co.jp/books/view/1960
- (28) 山泉進「刊行にあたって」『大学史紀要』一九号(『阿久
悠研究』、(二〇一四年)、六頁。
- (29) 明治大学史資料センター「明治大学小史―人物編」(学文
社、二〇一一年)、一頁。
- (30) 同前、II〜IV頁。
- (31) 同前、四六〜四七頁。
- (32) 立教学院展示館の教育利用の状況については、「特集―教
育利用」『立教、ディスプレイ―立教学院展示館年報』二号、
(二〇一七年)を参照されたい。
- (33) 『立教学院百二十五年史』編纂の際、各学部の意思決定に
関わる教授会記録にアクセスを試みたが、「文学部教授会記
録」の壁は、他学部のそれよりも高かった。
- (34) 佐藤雄基「大久保利武・利謙父子の学問形成と蔵書―立
教大学図書館・学習院大学史料館所蔵「大久保文庫」、『明
治が歴史になったとき』、一六八頁。
- (35) 中根美知代「量子力学の日本への移入と杉浦義勝」『日
本物理学会誌』七三巻六号、(二〇一八年)、三九五〜
三九六頁。
- (36) 中根美知代「世界の友への微笑がえし〜コペンハーゲン
に伝えられた理学部創設者の心」『立教学院史研究』一一
号、(二〇一四年)、六一頁。
- (立教学院展示館・学術コーディネーター/学芸員)